

三國志

卷の五

三國志

卷の五

吉川英治著



三國志卷の五

不許複製製

昭和二十二年十月十五日 印刷
昭和二十二年十月二十日 發行

定價 六十五圓

著 者 吉 川 英 治

發行者 東京都文京區音羽町三丁目十九番地
尾 張 眞 之 介

印刷者 東京都文京區久堅町百八番地
大 橋 芳 雄

印刷所 東京都文京區久堅町百八番地
共同印刷株式會社

發行所

株式會社

大日本雄辯會講談社

振替口座 電話 (33) 代表 一三一番
東京三九三〇 九段 一八六番

目次

臣道の巻

秘勅を縫ふ	二
油情燈心	四
雞鳴	三
青梅、酒ヲ煮テ、英雄ヲ論ズ	四

雷 怯 子

二六

兇 門 脫 出

七四

偽 帝 の 末 路

七五

霧 風

七六

一 書 十 萬 兵

一〇六

丞 相 旗

一〇六

關

一〇三

不 戰 不 和

一〇三

奇 舌 學 人

一〇四

雷 鼓 一六〇

鸚 鵡 洲 一七四

大 醫 吉 平 一八四

美 童 一九八

火 か 人 か 二二五

小 兒 病 患 者 二二七

玄 德 冀 州 へ 奔 る 二三四

戀 の 曹 操 二四二

大 歩 す 臣 道 二六一

破衣錦心

.....三

白馬の野

.....二五

報恩一隻手

.....二六

黄河を渡る

.....二八

燈花占

.....三六

装幀 恩地孝四郎
挿畫 矢野知道人

臣
道
の
卷

祕勅を縫ふ

一

禁苑の禽は啼いても、帝はお笑ひにならない。

簾前に花は咲いても、帝のお唇は憂をとちて語らうともせぬ。

けふも終日、帝は、禁中の御座所に、物思はしく暮しておぼした。

三名の侍女が夕の燭を點じて去る。

なほ、御眉の陰のみは暗い。

伏皇后は、そつと問はれた。

『陛下。何をそのやうに御宸念を傷めておいで遊ばしますか』

『朕の行末は案じぬが、世の末を思ふと、夜も安からず思ふ。……哀哉、朕は抑、いかなれば、不徳に生れついたであらう』

はら／＼と、落涙されて、

『——朕が位に即いてから一日の平和もなく、逆臣のあとに逆臣が出て、董卓の大亂、李傕、郭汜の變と打つゞき、漸く都をさだめたと思へば、又も曹操が專横に遭ひ、事々に、廟威の失墜を見ようとは……』

共にすゝり哭く伏皇后の白い御頸に、燭は暗くまたゝいた。

『政治は朝廟で議するも、令は相府に左右される。公卿百官はをるも、心は曹操の一顰一笑のみ怖れて、又、宮門の直臣たる衿度を持してをる者もない。——朕に於てすら、身は殿上にあるも、針の氈に坐してゐるこゝちがする。……噫、いつの日、この虐げと辱とからのがれる事ができるであらう。漢室四百餘年の末、今ははや一人の忠臣もないものか。——朕が身を歎くのではないぞ。朕は、末世をかなしむのである』

すると、

御簾の彼方に誰やら沓の音がした。帝も皇后もはつとお口をとぢた。——が、幸に案じた人ではなかつた。伏皇后の父の伏完であつた。

『陛下、お嘆きは、御無用でございます。こゝに伏完をりまする』

『皇丈。……御身は、朕が腹中のことを知つて、さう云はるゝのか』

『許田に鹿を射る事——誰か朝廷の臣として、切齒しない者がありません。曹操が逆意は、すで

に、歴々といへまする。あの日、彼が敢て、主上を僭し奉つて、諸人の萬歳をうけたのも、自己の勢威を衆に問ひ、自己の信望を試みてみた奸策に紛れなすと、わたくしは見てをりました』

『皇丈。ひそかに申せ。禁中も悉く曹操の耳目と思つてよいほどであるぞ』

『お案じ遊ばしますな。こよひは侍從宿直も遠ざけて、わづか忠良な者だけが遠く居るに過ぎませんから』

『では、そちの意中をまづ訊かう』

『臣の身がもし陛下の親しい國戚でなかつたら、如何に胸にある事でも、決して口外はいたしません』

と伏完は茲に初めて、曹操調伏の意中を帝に打明け、帝も亦、お心をうごかした。

『——が、いかにせむ、臣はもはや年も衰へ、威名もありません。今、曹操を除くほどな者といへば、車騎將軍の董承しかないと思ひます。董承をお召あつて、親しく密詔を降し給はば必ず御命を奉じませう』

事は、重大である。秘中の秘を要する。

——が、深く思ひこまれた帝は自ら御指をくひやぶつて、白統の玉帶へ、血しほを以て詔詞を書かれ、伏皇后にお命じあつて、それに紫錦の裏をかさね、針の目もこまかに玉帶の芯に縫ひこ

んでしまはれた。

二

次の日、帝は、ひそかに勅し給うて、國舅の董承を召された。

董承は、西安このかた、終始傍に仕へてあの犬亂から流離のあひだも、よく朝廷を護り支へて來た御林の元老である。

『何ごとのお召にや?』

と、彼は急いで參内した。

帝は、彼に仰せられた。

『國舅。いつも體は健かにあるか』

『聖恩に浴して、かくの如く、何事もなく老を養つてをります』

『それは何よりもめでたい。實は昨夜、伏皇后と共に、長安を落ちて、李傕、郭汜などに追はれた當時の苦しみを語りあひ、そちの功勞をも思ひ出して涙したが、考へてみると、今日まで、御身にはさしたる恩賞も酬はで過ぎた。——國舅、この後とも、朕が左右を離れてくれるなよ』

『勿體ない御意を……』

董承は、恐懼して、身の措くところも知らなかつた。

帝はやがて董承を伴つて、殿廊を渡られ、御苑を逍遙して、なほ、洛陽から西都、この許昌と、三度も都を遷したあひだの艱難を何かと語られて、

『思ふに、いくたびか、存亡の淵を経ながらも、今日なほ、國家の宗廟が保たれてゐることは、ひとへに、御身のやうな忠節な臣のあるおかげだ』

と、沁々云はれた。

玉歩は、更に、彼を伴つたまふ大廟の石段を上られて行つた。帝は、大廟に入ると、直に、功臣閣にのぼり、自ら香を焚いて、その前に三禮された。

こゝは漢家歴代の祖宗を祠つてある靈廟である。左右の壁間には、漢の高祖から二十四代にわたる世々の皇帝の肖像が畫かれてあつた。

帝は、董承にむかつて、

『國舅——。朕が先祖は、いづこから身をおこして、この基業を建て給うたか。朕が學問のために、由來を述べられい』

と、襟を正して下問された。

董承は、愕き顔に、

『陛下。臣に、いさゝか、おたはむれ遊ばすか』

と、身をすくめた。

帝は、一しほ厳肅に、

『聖祖の御事。かりそめにも、たはむれようぞ。すみやかに説け』

董承はやむなく、

『高祖皇帝におかれましては、泗上の亭長に身を起したまひ、三尺の剣を提げて、白蛇を芒碭山に斬り、義兵をあげて、亂世に縦横し、三年にして秦をほろぼし、五年にして楚を平げ、大漢國百年の治をひらいて、萬世の基本をお建て遊ばされたことは、——臣が改めて申しあげるまでもなく、兒童走卒といへども辨へぬはございません』

と、述べた。

帝は、自責して、さん／＼と御涙をたれられた。

『……陛下。何をそのやうにお嘆きあそばすか』

董承が、畏る／＼伺ふと、帝は嘆息して云はれた。

『今、御身の説かれたやうな先祖をもちながら、子孫には、朕のごとき懦弱なものが生れたかと思つて、朕は朕の身をかなしむのである。……國舅、更に説いて、朕に訓へよ。して又、その高』

祖皇帝の畫像の兩側に立つてゐる者は、どういふ人物であるか」

何か深い歎慮のあることは、董承にもはや察しられたが、帝の餘りにもきびしい御眼ざしに身も硬ばつて、彼は遽に唇もうごかなかつた。

三

壁の畫像をさして、帝は、重ねて董承の説明を求められた。——高祖皇帝の兩側に侍せるはそ

も如何なる人か、と。

董承は謹んで答へた。

『上は張良。下は蕭何であります』

『うゝ。して張良、蕭何のふたりは、どういふ功に依つて、高祖のかたはらに立つか』

『張良は、籌を帷幄の中にめぐらして、勝を千里の外に決し、蕭何は國家の法をたてて、百姓をなづけ、治安を重くし、よく境防を守り固めました。高祖もつねにその徳を稱せられ、高祖のおはすところ必ず二者侍立してをりましたとか。——故に後代ふたりを以て建業の二功臣とあがめ、高祖皇帝を畫けば、必ずその左右に、張良、蕭何の二忠臣を書くこととなつたものであります。』

『なるほど、二臣のやうな者こそ、眞に、社稷の臣といふのであらうな』

『……はつ』

董承は、ひれ伏してゐたが、頭上に帝の嘆息を聞いて、何か、責められてゐるやうな心地に打たれてゐた。

帝は、突然、身をかどめて董承の手をおとりになつた。はつと、董承が、恐懼して、うろたへを感じてゐると、低い御聲に熱をこめて、

『國舅。御身も今からはつねに、朕が側らに立つて、張良、蕭何の如く勤めてくれよ』

『畏れ多い御意を』

『否とか』

『滅相もない。たゞ、臣の驚才、何の功もなく、いたづらに侍側の榮を汚すのみに終らんことを懼れまする』

『いや、往年長安の大亂に、朕が逆境に浮沈してゐた頃から卿のつくしてくれた大功は片時も忘れてはゐない。何を以て、その功にむくいてよいか』

帝は、さう宣ひながら、親ら上の御衣を脱いで、玉帶をそれに添へ、御手づから董承に下賜された。

董承は、餘りの冥加に、やゝしばし感泣してゐた。そして拜受した御衣玉帶の二品をたづさへ、間もなく宮中から退出した。

すると、早くも。

この日の帝と董承の行動は、もう曹操の耳に知れてゐた。誰か密報した者があつたにちがひない。曹操は聞くと、

『はてな？ ……』

と、針のやうな細い目を幾々と一方に向けて、猜疑の唇を嚙んでゐた。

思ひあたる何ものかがあつたとみえる。曹操はにはかに車や供揃へを命じ、慌しく宮門へ向つて参内して來た。

禁衛の門へかゝると、

『帝には、今日、どこの臺閣において遊ばすか』

と、家臣をして、衛府の吏に問はせた。

『たゞ今、太廟に詣でられて、功臣閣へおのぼりになつてをられます』

と、聞くと、曹操は、さてこそと云はぬばかりな面持で、宮門の外に車を捨て、足の運びも忙しげに、禁中へ進んで行つた。